

淀川水系河川整備計画に基づく事業等の進捗点検に
 関する報告書に対する主な意見（案）
 【地域委員会・専門家委員会一覧表】

淀川水系流域委員会専門家委員会
 第4回委員会（H25.5.13）
 参考資料-1

地域委員会意見	専門家委員会意見
◎進捗点検の方法や指標に関する主な意見	
◆危機管理分野	
<ul style="list-style-type: none"> ・指標は開催回数となっているが、協議会に参加した人の効果が測定できるようにすべきである。また地域や行政としてはそれぞれ境界があるが、災害としては一つなので地域に縛られず住民、市町村、府県、国の連携が必要である。 ・進捗点検をする際、会議回数だけではなく参加者の内容（例えば親子、若い女性、リピーターなど）も確認することで、会議の効果を多様な視点で測れるのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・水害に強い地域づくり協議会を行ったという点検だけでなく、協議会を行った結果どのように受け止められているか、どのように普及したか、どのように役立っているかという点検も必要である。 ・水害に強い地域づくり協議会の参加者については人数だけでなく、同じ人ばかりの参加になっていないかや年齢等の統計も取って点検する必要がある。 ・洪水に関する情報の伝達は、単に市町村に繋げる光ファイバーケーブル設備を接続した数ではなく、例えば何割の市町村でCCTV等の防災情報を見ることができるのかを確認した方がいい。また個人宛の情報提供手段の検討とそれがどのように使っているのかモニタリングが必要である。 ・ウェブサイト等で個人が危機管理に関する情報をどのくらい取りに来ているかチェックする必要がある。
◆治水	
<ul style="list-style-type: none"> ・進捗点検の数字については絶対値ではなく実施すべき値に対する進捗の比率にしたほうがいいのではないか。 ・点検結果の所に、全体の進捗率が一目でわかるような工夫をしていただきたい。また何年までに完了するのかなどは地元も興味があり、整備計画期間の前半、中頃というオーダーで示すことも必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・NPOと連携している事例や過去の失敗事例は、情報の蓄積やどのように対応したかということが周りの参考にもなるため記載すべき。 ・進捗の指標として、掘削量とか工事の寸法諸元等を用いるだけでなく、疎通能力がどれくらい上がったかや、水位の低下範囲といった実施したことによるアウトカムの指標でも点検していただきたい。 ・進捗点検を行うにあたって、その事業の全体計画や前提条件を明確にする必要がある。

地域委員会意見	専門家委員会意見
◆維持管理	
	<ul style="list-style-type: none"> ・樹木伐採をすることによって河床の侵食が促進されて、河川の動態が復活することが環境サイドからも期待されるため、樹木管理や治水上の要請だけでなく総合的な評価をしていただきたい。
◆人と川とのつながり	
<ul style="list-style-type: none"> ・河川レンジャーの進捗状況を、現在のような河川レンジャーの人数や交流内容・回数では把握出来ない。何と何をつないだかや連携した相手の変化などを盛り込むべきである。 ・それぞれの河川において、河川レンジャー制度を検討している機関（琵琶湖河川レンジャーであれば「河川レンジャー制度運営委員会」）があるはず。その機関が各河川におけるレンジャーの現状や課題、成果に関して議論を行った結果の概要を、河川間で共有する必要があるのではないか。 ・いい川にしていく整備にどれだけ河川レンジャーが関わったかを新たな指標に設けてはどうか。 ・河川レンジャーの指標として、活動プログラムをどう組み立てているかがわかる指標を新たに設けてはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レンジャー制度として閉じた評価ではなく、環境、治水、河川管理等の観点からレンジャー活動を評価することも必要であり、指標のもう一つ外側に他の点検の項目に対する貢献度のような欄を設けてレンジャーはこれだけ自主的に掲げた目標に対して貢献しているという形で評価されてはどうか。

地域委員会意見	専門家委員会意見
<p>◆河川環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イタセンパラが増えたのは、人の手で外来魚を駆除した結果であり、市民参加の成果として活用されるべきであり河川環境が改善したということではない。イタセンパラが増えたのは元々いた場所でなく、違う場所に移っている。また、イタセンパラの増減には直接つながらない環境改善を実施している箇所もあるため指標には向いていない感じがする。 ・指標としてイタセンパラが挙がっているが、なぜイタセンパラなのかという事にも繋がるものとして、淀川流域のレッドデータブックのようなものを整理し、イタセンパラ以外の他の生物の経年的変化なども把握している中でイタセンパラを保全しているという資料が必要。 ・魚道の改良の成果は遊泳力の強いアユやビワマスだけを基準にするのは疑問である。もっと身近な魚、小さい魚が点検結果に表れてくることが望ましい。例えばハゼが一種類でも加えられるくらいでないと本当の連続性の評価は出来ない。 ・人が河川環境を回復しようとする活動をしているところについては、環境がよくなるということだけではなく、人と川とのつながりが強まり、維持管理にもつながっていくという視点から整備をすすめていただきたいし、そういう指標をいれていただきたい。 ・1つの地点でいくつかの事業が実施されているケースがあるため、事業評価をする際、事業対象地域に関連する複数の事業を地図上で把握し、それら事業の影響も含めて総合的に効果を整理すべき。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イタセンパラに対する改善としての効果を位況、流況の方からアシストできたか、また外来魚に対する対策がそれに結びついたか、それぞれの場所でこのイタセンパラに向けた評価というものをやっていくことも必要ではないか。 ・河川の連続性が生態系の類型からしてどこからどこまでの間を結びつけることができたかという視点での評価が本来あるべきである。魚類の個体数、遡上した個体数は有効な指標だが、地域の住民が調査に参加することによって効果的に評価の数字をモニタリングすることができるというような考え方で住民参加に結びつけていってはどうか。 ・淀川大堰から下流の新淀川のところは極度に不連続になっており、そこにもう少し淡水を供給して、汽水域の環境をつくり出すということが究極的な河川の連続性という概念につながる。そういう意味で内湾環境の評価については、もう少し実質的な環境改善策に結びつくような指標で今後見ていっていただきたい。 ・既設の堰・落差工の改良については優先順位やできない理由を明確化していくべき。 ・河川環境の調査結果について、比較する条件が異なる場合は、調査方法や調査場所など条件を明示すべき。
<p>◆利水</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今の指標は、結果的にその評価としては、規制側に働いていなければならないが、実際に求めていることは、その水の融通や、あるいは利用の促進であり、指標としては、どれだけその水利権のまたがったところで融通ができたかというような、その自主的な指標を何らかの形で設けられないか。量を計るとこんなメリットがあるというところを出していく必要がある。

地域委員会意見	専門家委員会意見
<p>◆利用</p> <p>・水辺の楽校について、小学校区ごとに水辺に近づける場所・安心して遊べる箇所をチェックしてもらいたい。 小径について、整備された全体延長が記載されているが、「ここだけは整備しないと歩けない」「整備した結果、これだけの延長がつながり整備効果があった」といった整理ができないか。</p>	<p>・川らしい利用の促進のために川らしくない利用を規制する方向の点検の仕方ではなく、川らしい利用がどれだけ増えたかという点検の仕方をした方がよいのではないか。またそういった点検をレンジャー等の業務に包括することでつながりのきっかけにもなる。</p> <p>・河川の利用に関してはどんな利用を促進できたかということが重要であり、指標の中に利用実態のモニタリングという項目を設けていただいて、保全利用委員会の中で検討していただくことで、その結果がこの進捗点検の中にも反映されてくるのではないか。</p> <p>・河川レンジャー等によって川らしい利用の実態調査を行うことで、遊び方や場所の提案が出来るようになる。また川らしい利用を促進していくための調査になり得るのではないか。</p> <p>・バリアフリーについては点検の方法を再検討するべき。</p>
<p>◆全体</p>	<p>・全体を総合してみた時に、各項目間でトレードオフの関係にならざるを得ないものがあるため、トレードオフの関係にある指標について整理して示すべき。</p> <p>・進捗率だけでなく、進捗のプロセスをどう評価するかが重要。同じ1%でも内容によって重みが違う。例えば回数が減ったからといって質が低下するわけではない。</p> <p>・国として、流域全体を掌握する立場から流域管理を前面にだした新たな観点があるのではないか？</p>

地域委員会意見	専門家委員会意見
◆治水	
<ul style="list-style-type: none"> ・桂川掘削の現場でデレーケの水制の遺構が出たが、遺構を残すように掘削形状を工夫していただきたい。 ・治水事業の効果やスーパー堤防等の変更の考え方についてもっとわかりやすく説明するべき。 ・事業等の優先順位をマクロ的に説明する工夫があると良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・治水の堤防強化に伴う環境配慮の例は非常に好ましく、このような手法を木津川一地域で終わらせるのではなく、淀川水系管内でそれぞれの場所にあった方法を追求していただきたい。 ・水門や陸閘等の操作で想定しているオペレーションで対応できないような場合も、今後増えてくると思われ、それに対応できるよう災害対策計画書等シナリオの点検も必要になってくる。
◆維持管理	
<ul style="list-style-type: none"> ・伐採した樹木について無償提供をされているが、実施日が平日だけである。土日にしか行けない市民もおおり、うまく捌けるような工夫をいただきたい。また伐採についても市民団体などに委託することによりコスト縮減にもなり、なにより自分で管理をしているという意識にさせることができ、それが今後につながってくるため検討していただきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・樹木伐採については伐採のやり方に応じて、ライフサイクルコストや次の伐採までのサイクルは変化するため、メンテナンス方法を整理し、経済性や土砂移動の観点も踏まえ、今後の計画にフィードバックする必要がある。 ・樹木伐採について計画していく際に、流水による自然攪乱を見込む事は楽観的であり、自然攪乱において再繁茂を抑制できない等最悪のシナリオを想定した計画を立てていくべきである。

地域委員会意見	専門家委員会意見
◆人と川とのつながり	
<ul style="list-style-type: none"> ・河川レンジャー活動をしたという結果を記録としてマップ化し、蓄積されてくるとどこにいるんやという話はなくなると思う。もちろんそういう地図で計りきれない活動もあるので、そこは何か一工夫あるといいのではないかと思う。 ・各河川での河川レンジャーが活動しているフィールドを示し、活動内容毎で色分けをするなどした図面があると議論をする際の参考になる。 ・市民活動の評価はどのように行うのか、整備局として何を期待しているのかということは以前より疑問にあった。市民団体にどのようにインセンティブをもってもらえるのかなど、答えは難しいが、意見交換を行う中で方向性を見いだせないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・河川レンジャーがなかなか新しい人が埋まらない事や新しく始まった河川レンジャーアドバイザー制度についての課題について分析をし、河川レンジャー制度が発展できるような形を検討すべきである。 ・河川レンジャー自らが、人と川をつながりを持たすことにつながった実質的によい活動というのは何回できたという形で評価をすることで、今後どういうふうにレンジャー自体を進めていったらいいのか検討することを提案する。 ・河川レンジャーの活動内容を分析し、どういった分野に波及して効果がある等の検討を行ってはどうか。
◆河川環境	
<ul style="list-style-type: none"> ・イタセンパラなどの絶滅危惧種を保全する事業と並行して、今までの川で見られていた人が川とふれあう環境づくりもきちんとして行っていただきたい。 ・城北ワンドでのタナゴ類の増加というのは、外来魚駆除の成果である。イタセンパラ1種を保護していくのではなく、淀川水系で象徴的なイタセンパラを保護することにより、在来種全体がよくなって来ている。 ・イタセンパラを食べる外来魚を駆除したから良いということではなく、トータルの環境として場所ができて初めて河川環境が保全・創出されたことになる。水位操作を工夫する中で、象徴的な場所を作るのも今後の課題。 	<ul style="list-style-type: none"> ・魚の産卵孵化という点では、ヨシの干出を防ぐのは良いが、ヨシの再生を考えるなら、ヨシの発芽時期は魚の産卵時期とかぶり、発芽時期は水位が低い方が良く、冠水状態が続くと再生しない。 ・在来魚はヨシに限って産卵しているのではなく、ゴミや人工の産卵藻（きんらん）にも産卵しているので、人工物を産卵場として提供するの也不错。

地域委員会意見	専門家委員会意見
◆利水	<ul style="list-style-type: none"> ・一件も許可水利権化が出来なかったことが、どういふことかを考える必要がある。何か調整の仕方を工夫しないと実行不能ではないか。 ・慣行水利権の問題については、許可水利権化した件数だけでなく、取水量という観点も重要であり、全体の件数が多い中で、取水量が多いものについては許可の切りかえの時に積極的に協議を行うなど、メリハリがあった方がいいのではないか。 ・慣行水利権については淀川流域だけの問題ではなく全国的な問題なので、農水サイドと今後の方針について合意形成を図って、農水サイドの方からシステムを改善していくというような面も必要ではないか。 ・慣行水利権の問題については、各方面への影響を考慮しながら少し調整の仕方を変えて、実績をたくさん積み上げていくということが将来的に水利権をクリアにしていくことにつながるのではないか。 ・環境において生態系への配慮はかなりされていると思われるが、少し生態系に偏っているように思える。生態系への配慮のため平水位を下げることで、利水環境のリスクは高くなることとなり、それに対応するための各機関との連絡調整が大事である。
◆利用	<ul style="list-style-type: none"> ・河川保全利用委員会は今まで狭い範囲の機能しか持ち得ていなかったが、利用という観点について幅広く現状を改善していくために何をしたらいいのかということを考える委員会として改善を図っていくということも検討してはどうか。 ・身障者が憩い・安らぐためには何が必要なのかということを考えるべき。 ・散策路やスロープの整備は望ましいことだが、都賀川での水害の事例も踏まえ、危険があることを示す表示やいざというときに河川外へ逃げられる避難路等の整備もセットで実施するべきである。
◆全体	<ul style="list-style-type: none"> ・意見の内容が多岐にわたっており、意見が求めている事業の実施主体も国、県、市等複数にわたっている。それぞれの役割、責任を理解した上で何がどう連携出来るのかを検討する必要がある。